

# 豆潜水艇の行方

海野十三

青空文庫



## 世界一の潜水艇

みなさんは、潜水艇というものを知っていますね。

潜水艇は、海中ふかくもぐることの出来る船です。わが海軍がもっているのは、潜水艦といいますが、これは世界一のりっぱなものです。潜水艇がりっぱなだけではなく、それにのりくんである海軍の士官や水兵さんや機関兵きかんへいさんたちもりっぱで、これも世界一です。

私がこれからお話ししようと思えますのは、「豆」という名を

もった小さい潜水艇の話です。

もつとも、豆潜水艇という名は、この豆潜水艇の発明者であり、これをつくりあげた青木学士がつけた名前ですが、その青木学士と大の仲よしの水上春夫少年は、これを豆潜水艇といわないで、ジャガイモ潜水艇といっています。

ここで、ちよつと二人のこえをおきかせしましょう。二人がいあつているところは、その豆潜水艇がおいてある青木造船所の中です。

「おい春夫君。君は、この潜水艇のことを、ジャガイモ艇などわかる口をいうが、なぜ、ぼくがいうとおり、豆艇とよばないのかね」

「だって、青木さん。豆というものは、だいたい丸いですよ。ところが、青木さんのつくった潜水艇は、でこぼこしているから豆じゃなくて、ジャガイモですよ」

「でこぼこしているって。なるほど、それはそうだ。舵かじがついていたり、潜望鏡せんぼうきょうといって潜水艇の目の役をするものをとりつける台があったり、それから長い鎖くさりのついたうきがとりつけてあったり、すこしはでこぼこしているよ。しかしとにかく、海軍の潜水艦にくらべると、たいへん小さい。豆潜水艇の中のひろさは、バスぐらいしかないから、ずいぶん小さいではないか。だから、豆のように小さい潜水艇、つまり豆潜水艇とっていいじゃないか」

「だって、青木さん。ぼくには、でこぼこしているところが、気になるんですよ。どう考えてみても、やっぱりジャガイモ艇だなあ」

「いや、豆潜水艇だよ」

豆がほんとうか、それともジャガイモがほんとうか。青木学士と春夫君のことばあらそいは、どこまでいつても、きりがつきません。

だから、そのきまりは、もっとあとにつけることにして、私はこちらで、二人とも、まだ気がついていない一大事について、皆さんにお話いたしましょう。

皆さん、ここは東京の山の手にある大きな洋館のなかです。

森にかこまれたこの洋館は、たいへんしずかです。

窓のそとは、まつくらな夜です。そして、ほうほうと、森の中からふくろうの鳴いているこえがきこえます。

部屋には、明るく電灯がついています。そして三人の西洋人が、大きな椅子いすにこしをかけて、お酒をのみながら、話をしています。「むずかしいのは、わかっているよ。しかし、われわれはどうしても、命令にしたがって、やるほかない」

三人のうちで、一ばんえらい人が、英語でそういいました。この人は、たいへんやせぎすですが、一ばんりっぱな顔をしています。

「しかしタムソン部長。あれだけ大きいものをもちだすのは、な

かなかですよ」

軍人のように、がっちりしたからだをしている西洋人が、両手を一ぱいにひろげました。この人の顔は、酒のためにまっかです。「スミス君。われわれは今、大きいだの、おもいだの言っていられないのだ。本国の命令で、ぬすめといわれたのだから、ぬすむよりしかたがない。そうじゃないかねえ、トニー君」

と、タムソン部長は、もう一人の、女のようにやさしい顔つきの青年によびかけました。

「はい。部長のおっしゃるとおりです。命令ですから、やるほかありません。早く、どうしてそれをぬすみだすか、その方法をこそうだんしようじやありませんか」



「いや、トニーの言葉だけれど、いくらぬすむといつても、かりにも潜水艇一隻だ。<sup>せき</sup>あんな大きなものをぬすめると思つては、ま  
ちがいだ」

この話から考えると、三人は潜水艇をぬすむ話をしているので  
す。そしてその潜水艇というのは、じつはさつきお話しした青木  
学士のつくつた豆潜水艇のことなのであります。だからこれは  
たいへんです。

「考えれば、きつといいちえが出てくるものだ。およそ世の中に、  
人間がちえをしぼつて、できないことはない。さあ、三人でちえ  
を出そうじゃないか」

と、タムソン部長は、二人をばげましながら、酒のはいったび

んをとりあげて、二人のまえのさかづきに、酒をついでやりまし  
た。

どく  
毒ガス弾 だん

酒をのみながら、ものを考えて、どんなちえが出るでしょうか。  
とにかくその夜のうちに、タムソンたちは、ついにある奇妙な方  
法を考えつきました。

「はははは、これなら、きつとうまくいく」

「なかなかおもしろい方法ですね」

「いや、考えてみれば、やっぱり方法があるものですねえ」

三人は、たいへん、うれしそうです。その喜んでいるありさまから見ると、豆潜水艇をぬすみだすのになかなかいい方法を考えついたようです。いったいそれは、どんな方法であったか、それはしばらくおあずかりにしておくことにしましょう。

それから、十日ほどすぎました。そこで話は、造船所のすみところがつている豆潜水艇のことになります。

この潜水艇は、すっかり出来あがっていました。艇内には、すでに食べものや、水や、ハンモックなどもつみこまれ、いつでも出かけられるようになっていました。ただ、この豆潜水艇は、ま

だ台のうえにのっています。艇の下をささえているくさびをはずせば、この潜水艇は、台の上をよこすべりして、ぼちゃんと海へおちて、うかぶようになっています。つまり、あとは進水式だけがのこっていたのです。

進水式のことを、青木学士も春夫少年も、どんなにか、待ちこがれていました。豆潜水艇は、進水をすませると、そのまま港を出かけることになっていました。もちろん、乗組員ていちようというのは、艇長の青木学士と、それから副艇長の春夫少年の二人きりでありました。

それは、いよいよ明日が、待ちに待った進水式だという、その前日の夜のことでありました。青木学士と春夫少年は、潜水艇の

中にはいって、しきりに艇内をとりかたづけていました。

そのとき、このまつくらな造船所へどこからやってきたのかくろい服をきた、十四五人のからだの大きい人が、しのびこんでまいました。

「あ、部長。あれが潜水艇ですよ。青木学士の発明した世界一小さい潜水艇は、あれなんです」

「おお、あれか。あのぼーつとあかるいのは、なにかね」

「あれは、潜水艇の出入口の蓋ふたがぁいていゝのです。艇内にはだれかがいて、電灯をつけているから、それが出入口のところから外にもれて、あのように、ぼーつとあかるいのです」

「ああ、そうかね、トニー。しかし、中に人がいるのでは、ぬす

むのに、つごうがわるいじゃないか。なぜとって、そうなる、きつと相手がさわぎだすにちがいないからね」

「しかたがありません。すこし荒っぽいが、あいつらを、ねむらせてやりましょう」

「ねむらせるといって、どうするのか」

「毒ガスを使うのです。みていてください」

トニーは、三四人の仲間をつれて、そつと潜水艇の近くにしのびよりました。トニーの手には、手榴弾てりゆうだんのような形の毒ガス弾がにぎられています。

「やるから、みんな、用心をして……」

トニーは手をあげて、合図をしました。それから、豆潜水艇の

そばによると、蓋のあいだから毒ガス弾を、えいとなげこみました。

「それ、蓋をしろ！」

トニーの二度目の合図で、うしろにしたがつていた数人の大きな男は、豆潜水艇のうえにとびあがると、ちよつと蓋の中に手をさし入れて、つつかい棒をはずし、蓋を上からおさえて、ぴしゃんとしめてしまいました。

「よし、大出来だ。早く、あれをかぶせろ」

トニーの号令で、うしろに待っていたタムソン部長たちの一団は、懐中電灯をふつて合図をすると、くらやみの中から、大きなトラックが、あとずさりをしてきました。

そのうえには、大なバスの車体がのつていました。ぎりぎりと言がして、もう一台別のトラックの上にしかけてあった起重機きじゆうき（重いものをつりあげる機械のこと）から、鎖くさりのついたかきがおりにきて、バスの車体をつりあげました。そしてその車体を、豆潜水艇のうえに、すっぽりかぶせてしまったのです。

つまり、そのバスは、ちよつとみると、本物のバスのようにすが、じつは、車がついていないもので、いわば箱の蓋ばかりのようなものでありました。

豆潜水艇は、外から見ると、まるでバスのようなかたちになりました。

そのうちに、別のトラックが、ぎりぎりと言をくりだして、豆



潜水艇を、トラックのうえに引きあげました。これはただのトラックではなく、軍隊でよく使っている牽引車けんいんしゃというものと同じで、すばらしい力を出すものでありました。

「よかろう。いそいで、出発しろ」

タムソン部長が命令をくださったので、豆潜水艇を、バスの車体の中にかくしてつみこんだトラックは、そのまま走りだしました。そしてやみの中にかくれると、どこともなくいつてしまいました。さあ、たいへんなことになりました。毒ガスにみまわれた青木学士と春夫少年は、どうなったでしょうか。そして、豆潜水艇は、どこへもつていかれたのでしょうか。

## 警戒の目

豆潜水艇をつんだトラックは、いま国道をどんどん西の方へ走っていきます。

国道には、お巡りさんまわが、交番の中から、じつと夜の番をしていました。

もし、国道をあやしいものがおれば、「とまれ！」と命令して、しらべるつもりでありました。

お巡りさんの前を、豆潜水艇をのせたトラックは、すこしもと

がめられないで、通りすぎていきました。

その次の交番でも、やはりおなじように、通りすぎました。

なにしろ、お巡りさんが見ても、憲兵けんぺいさんが見ても、造船学の大家が見ても、まさかトラックのうえに豆潜水艇がのつていと、気がつくわけがありません。

それもそのはずです。そのトラックの上にあるのは、どう見てもバスとしか見えません。まさかその下に、豆潜水艇がかくれているなどとは、神さまだつて気がつかないでしょう。

トラックは、どんどん国道を西に走りつづけます。

豆潜水艇は、トラックのうえで、ごんごんと、ゆれていきます。

トラックの運転台では、運転手と、その横にのっているトニーという外人とが、英語で話をはじめました。

「トニーの旦那、ちよつとうしろを、みてください」

「なんだって、うしろをみろというのかね」

「なんだか、うしろでごんごんごんといっているが、大丈夫ですかい」

「なに、ごんごんごんといっているって。あ、そうか。ひよつとしたら、豆潜水艇が、車の上からすべりおちそうになったのかもしれない。まてよ、いましらべてやる」

トニーは中腰ちゆうごしになって、うしろへ懐中電灯をてらしてみました。

「大丈夫だよ。綱はちゃんとしているよ」

トニーは、バスと車体とをむすびつけている綱のむすび目が、しっかりとしているのをみて、安心したのでありました。

そういわれて、運転手は、

「そうですかねえ。しかし、ごんごんと、いつていますよ。

ふしぎだなあ」

「それは、お前の気のせいだろう」

「そうですかなあ」

運転手の耳には、トニーにはきこえない変な音がかんじるのでしょうか。

しばらくたって、運転手はまたトニーにはなしかけました。

「あ、またきこえた。トニーの旦那、いままた、大きくごつとんと、うごきましたよ。ああ気持ちがいい。そのうちに、豆潜水艇が、道のうえに、ころがりおちてしまいますよ。もういちど、よくしらべてください」

「大丈夫だというのになあ」

トニーは、もういちど、綱のむすび目をよくしらべました。しかし、さつきと同じで、べつにとけた様子もありませんでした。

くらい海

そのうちに、トラックは、大きな川つぷちにつききました。

石垣いしがきの下に、だるま船が待っていました。

岸から板がわたしにかけてありましたから、トラックのうえのもつであるバスは、しずかに板のうえへおろされ、そしてだるま船の中につみこまれました。

「オーライ。さあ、早いところ、でかけよう」

トニーが手をあげると、だるま船は、すぐエンジンをかけました。

一同は、だるま船の中にのりうつりました。だるま船は波をけたてて、川下へくだっていきました。

くらい川の面には、このだるま船の行く手をさえぎるものもい  
ません。

「しめた。水上警察すいじょうけいさつも、こつちに気がつかないらしい。さあ、  
どんだんいそげ。本船じゃ、まっているだろうから」

だるま船は、川口を出て海に入ると、こんどはさらに速度をあ  
げて、沖合おきあいへすすんでいきました。

「トニーの旦那、針路は真南でいいのですかね」

「まあ、しばらく真南へやってくれ。そのうちに、無電がはいっ  
てくるだろうから、そうしたら、本船の位置がはつきりする」

トニーは、舳ともに腰をおろして、しきりに受信機をいじっていま  
した。



それからしばらくたつて、トニーが、耳にかけていた受話器を両手でおさえました。

「あ、本船が出た。エデン号だ」

トニーは、耳にきこえるモールス符号ふごうを、すらすらと書きとつていましたが、そのうちに、彼も電鍵でんけんを指さきで、こつこつとおして、なにごとかを無線電信で打ちました。

そうして、両方でしきりに通信をかわしていましたが、やがてそれも終わりました。

「おい、わかつたぞ。左舷前方さげん三十度に赤い火が三つ檣ほぼしらに出ている船が、われわれを待っているエデン号だそうだ。船をそつちへ向けなおして、全速力でいそげ」

トニーは、ふなべり舷をたたいて、そうさげびました。船は、向きをかえると、出るだけ一ぱいの力を出して、くらい海面をいそぎました。

エデン号に行きついたのは、それから約二時間のちのことでありました。

「エデン号かね。こっちはタムソン部長の命令で、豆潜水艇をつんできたトニーだよ」

「おう、まっていた。トニー君。大へんな手がらをたてたものだな。わが海軍でねらっていた青木学士の豆潜水艇を、そっくり手に入れるなんて、この時局がら、きつい手がらだ。あとでうんと懸賞金が下るだろうぜ」

「その懸賞金が、目あてさ。その金がいれば、おれは飛行機工場をたてるつもりさ」

「はははは、もう金のつかいみちまで、考えてあるのか。手まわしのいいことだ、はははは」

あぶない荷あげ

「さあ、その大したえものを、こっちの船へ起きじゆうき重機でつりあげるから、お前たち、下にいて、ぬかるなよ」

「おい来た。大丈夫だい。まずこのバスがめんどうだから、そら、みんな手をかせ。こいつを海の中へ、たたきこんでしまうんだ」

「よし、みんな手をかせ」

「うんとこ、よいしょ」

だるま船の中では、豆潜水艇のうえにかぶせてあったバスの車体を、みんなでもちあげました。

そして、舷のそばまでもって行って、よいしょと海中へなげこみました。大きな水音がすると同時に、船がぐらつとゆれました。いきおいあまつて、二人ほど、海中へおちこんでしまいました。しかし、いずれも船へおよぎついてきました。

さあ、それからいよいよ、豆潜水艇を起重機でつりあげる作業

です。

本船からは、起重機の腕が、ぐつとだるま船の上にのびてきました。そしてその先から、くさりがじやらじやらと音をたてておりてきました。

「困ったなあ。この潜水艇は、丸いうえにすべっこくて、くさりをかけるところがありやしないよ。トニーの旦那、どうしましやう」

「どうしましやうといって、どんなにしてもつりあげなくちや、せつかくのえものが、役に立たんじやないか」

「でも、こいつをくさりでつりあげるのは、ちよいと大へんですぜ」

「ずるをきめこまないで、さあ、くさをこういうぐあいにかけて、むすんだむすんだ」

「こういうぐあいにですかい。そんなぐあいにいくかな。なんだか、あぶないと思うが……」

「やれ。やるんだといったら、やるんだ」

トニーがしかりとばすので、みんなも仕方なく、大汗を出して、くさを豆潜水艇にぐるぐるとまきつけました。

「おーい、まだかい」

本船では、どなります。

「もうすぐだ。よし、起重機のくさをまけ」

「おいきた」

がらがらと、起重機のくさりがまきあがっていきます。やがて、くさりはぴーんとはり、豆潜水艇はしずかに、だるま船の上につきあげられていきました。

「うまくいった。そこで起重機をまわして……」

起重機は、豆潜水艇をつつたまま、本船へ、横にぐつとまわしはじめました。

「あぶない！」

だれかがさげんだのです。

そのときはもうおそかった。豆潜水艇をつつたくさりが、ぎしぎしなると同時に、くさりはすべり、豆潜水艇の胴から外れはずました。あれよというまに豆潜水艇は、がたんとかたむき、そして次

ぎの瞬間には、艇はくさりからぬけ、大きな水音をたてて、海の中におちてしまいました。

さあ、たいへん。せつかくのえものが、海底へおちてしまったのです。

### 豆潜水艇の中

さあ、たいへんなことになりました。

みなさんがごしんぱいの豆潜水艇は、まっくらなふかい海のそ



ここに横たおしになってねています。

あたりの海底には、林のように藻もや昆布こんぶるいが生いしげついで、これがひるまなら、そのふしぎな海のその林のありさまや、ぶくぶくと小さな泡が上の方へつながつてのぼつていくのが見えるはずですが、今は夜中のこととて、何も見えず、一切まつくらです。

さあ、豆潜水艇は、もうたすかる道はないでしょうか。中にのっている水上春夫君と青木学士は、今どうなっているでしょうか。二人とも、怪しい外人のなげこんだ毒ガスにやられて、冷たくなつており、いま海のそこになえていることにも気がつかないのではないのでしょうか。ところが、そのときです。とつぜん豆潜水艇が、

ぱつと黄色い二つの目をひらきました。

いや、それは本当の目ではありませんでした。それは豆潜水艇の横腹についている、丈夫なガラスをはめた窓まどに、あかりがともつたのであります。もちろんそのあかりは、艇の中にあるあかりです。窓から外へ、さつとながれだした黄色い光が、すこしずつうごいて、海かい藻そうの林をてらしつけます。その間にねむっていた鯛たいていのようなかたちをした魚の群が、とつぜん、まぶしいあかりにあつて、あわてておよぎはじめました。まるで銀の焰ほのおがもえあがつたようです。あかりは、なおもすこしずつうごいていきます。はてな、一たいどうして豆潜水艇の中にあかりがともつたのでしょうか。

そうなる、豆潜水艇の中を、ちよつとのぞいてみたくなりま  
すね。では、のぞいてみることにしましょう。

豆潜水艇の中は、うすぐらい電灯でてらされていました。  
ごつとん、ごつとん、ごつとん。

重い機械がまわっているらしく、かなり大きな音がしています。  
それはエンジンとポンプとが一しよにまわっている音でありまし  
た。

水上春夫君と青木学士は、どこにいるのでしようか。

あ、いました。二人は、豆潜水艇の舳ともに近いかべに、いもりの  
ように、へばりついているのでした。

「青木さん。海のそこは、きれいですね」

「ああ、きれいだよ。しかし春夫君。今は、きれいだなあなんて、かんしんしてはこまるよ。できるだけ早く、ここをはなれないといけないのだ。これで、あたりの海のそのようすは、だいたいわかったから、すぐに艇をうごかそう。さあ、君も手つだいたまえ」

「ええ、こうなったら、どんなことでもやりますよ」

「では、もう外のあかりをけすよ」

スイッチの切れる音がしました。そしてさつきからうしろ向きになっていた二人は、かべからはなれて、こつちを向き直りました。

二人は、防毒面をかぶっていました。

## かたむき直し

「右舷<sup>うげん</sup>メインタンク、排水用意！」

「用意よろしい」

「ほんとかね。弁は開いてあるかね」

「大丈夫ですよ、青木さん。もっとしっかり号令をかけてよ」

「よし。それじゃ、やるよ。……圧<sup>あつさく</sup>搾<sup>さく</sup>空気送り方、用意。用意、

よろしい。圧搾<sup>あつさく</sup>空気送り方、はじめ！ はじめ！ 傾<sup>けいど</sup>度<sup>ど</sup>四十五：

……」

豆潜水艇の中で、青木学士はひとりでさげんでいます。自分で号令をかけて、自分で仕事をやっているのです。なにしろ、この艇の中には乗組員はたった二人しかいないのですから、いそがしいことと云ったら、たいへんです。

かん、かん、かん、かん。

金具がすれるような音がきこえています。それとともに、今までたいへん右舷へかたむいていた豆潜水艇が、すこしずつかたむきをなおしてくるのがわかりました。

「青木さん。うまくなおってきましたね」

「ああ、この分なら、あと十六七分のうちに、ちゃんとなるだろう」

エンジンとポンプとが、あらい息をはいて、カ一ぱいうごいでいます。

「どうして、左舷のメインタンクが開かなかったんだろうなあ」  
「だって、いきなり艇が海の中へおちたから、故障がおきたのでしょう」

「さあ、どうかね。とにかくそんなことはないようにつくったつもりだったかねえ」

青木さんは、ふしぎそうにそういいました。

青木さんは、艇が海のなかにおちたと知ると、すぐにエンジンをかけ、メインタンクを開いたのです。そうすると、水がはいってきますから、潜水艇はしずみます。

そうしないと、艇はおちたいいきおいで一たんしずみ、しばらくすると、また海面にうきあがるから、それでは悪人どもにまたつかまると思ったので、すぐタンクをひらいて、艇が海底におりたまま、うきあがらないようにしたのです。しかしそのとき、右舷のタンクはひらいたが、左舷のメインタンクがひらかなかつたので、左舷タンクには水が入ってきませんでした。そこで、艇はひどくかたむいていたのです。

エンジンは、しきりにまわっています。

「防毒面はもうしばらくがまんしてかぶっているのだよ。今、艇内の毒ガスをおいだすと、そばにいる例の怪しい船にされるからね」



青木さんが、ふと気がついたようすで、いいました。

「いつまでも、がまんできますよ」

「しかし、あのときは、あぶなかったねえ。悪い奴が、毒ガス弾をなげこんだとき、あわてないで、すぐ用意の防毒面をかぶったからよかったが、うっかりしていれば、今ごろは冷たくなつて死んでいるよ」

「それよりも、ぼくは、青木さんが、艇内に防毒面をそなえておいた、その用意のよいのに、かんしんするなあ」

「そんなことは、べつにかんしんすることはないさ。コレラのはやる土地へいくには、かならず、水を水筒すいとうに入れてもつていくのと同じことだ。これからは、防毒面なしでは、外があるけない

「よ」

忘れもの

豆潜水艇のかたむきは、すっかりなおりました。艇は今、海のそこから五メートルほど上に、うきあがっています。

艇長さんの青木学士は、こんどは舵かじをうごかす舵輪だりんにとりついて、かおを赤くしています。

「よし、このくらいで、ここをさよならしよう」

「青木さん、これからどっちの方へいくのですか」

「これから、ずっと沖の方へ出てみよう。その方が安全だし、ちようど試運転にもいいからねえ」

「じゃあ、このまま外洋に出るのですね。ゆかいだなあ。青木さん、艇には、いる品ものはみんなそろっているのですか」

春夫は、しんぱいになって、たずねました。

「うん、ちよつと入れのこした品ものがあるんだ。しかし今さら、とりにかえるのも、めんどうなのでね」

「その足り<sup>た</sup>ない品ものというのは、一たいなんですか。たべものとか、水とかが足りないのではないのですか」

「あははは。君はくいしんぼうなんだね。だから、たべものなの、

水だのの<sub>レ</sub>ことを、しんぱいするんだね。安心したまえ。その方はじゆうぶんとはいかないが、せつやくすれば、二人で三十日ぐらいくらしていけるだけはある」

「へえ、そんなにあるのですか」

春夫は、三十日分もあるときいて、目をまるくし、つばをのみこみました。

「それで、なにが足りないのですか、青木さん」

「その足りない品ものというのはね、当局からもらったきかんじゆう機関銃だよ」

「へえ、機関銃ですって？ そんなものを、どうしてももらったのですか」

「だって、太平洋は、いま武装しないでは、あぶなくて航海できないじゃないか。おねがいしてやつともらったんだけど、大切なものだから、一番あとでのせるつもりでいたから、つめなかつたんだよ」

なるほど、いま太平洋はいつ敵国の軍艦や飛行機から攻撃こうげきを受けるか、たいへんあぶない時期にはいつていた。そういう場合に日本男子は、おめおめ敵のためにしずめられたり、とりこになつたりしてはいけない。むかつてくる敵にたいしては、あくまでたたかうのが日本男子である。もうこうなれば、兵隊であろうが、なかろうが、かくごはおなじことである。

そういう時期にはいつているのに、青木学士は、身をまもる機

関銃を忘れたといつて、あんがいへいきでいるのである。

春夫は、あきれた。

「そんなものをわすれてきては、こまりますね。ほかに、武器はあるんですか」

「かくべつ武器と名のつくものはないよ。しかし、敵が向つてきても、またなんとかうまくあしらつてやるよ」

「銃も刀もたないで、敵に向うなんて、らんぼうじやありませんか」

「そうだ。ちよつとらんぼうらしいね。あははは」

青木学士は、べつにおどろいた風でもなく、なぜか、からからとわらいました。

豆潜水艇は、どこへいく？

次ぎの日に、海上において、おどろくべき事件がおころうとは、春夫はもちろん、青木学士さえも、しらなかつたのであります。

ねむりにつく

「春夫君。君はもうねたまえ」と、青木学士がいました。

「まだねむくありませんよ。それにこの豆潜水艇には、まだいろ

いろいろ用事がのこっているでしょう。ぼくも手つだいしますよ」

春夫少年は、防毒面の中から、二つの目をくるくるうごかして言いました。

「いや、君はねたまえ。明日になったら、また、うんとはたらいてもらおう用事ができるから、今夜はもうねたまえ」

青木学士が、しきりに春夫少年にやすむようすすめました。

「じゃあねますが、この豆潜水艇に、なにかかわったことがあれば、すぐおこしてくださいね。ぼくだって、これでなかなか役にあたりますよ。航海のことは、海洋少年団にいたとき、一通りならつたのですからね」

「わかったわかった。早くねたまえ」



そこで春夫少年は、すこしきゆうくつですが、防毒面をかぶったまま、きかいときかいの間に毛布をしいて、その中にもぐりこみました。やがて、その日のつかれが一度に出て、春夫は大きないびきをかいて、ねむってしまいました。

青木学士は、そのありさまを、にこにこわらいながら見ていましたが、春夫がすっかりねむってしまうと、彼はひとりで配電はいでん盤ばんの前にたち、受話器を頭あたまにかけ、水中聴音機ちようおんきのスイッチを入れられました。そして目盛盤めもりばんをしきりに右に左にまわしてみながら、なにごとかをうかがっているようでありました。その顔は、しんけんに見えました。

しばらくして、学士が、ほっとためいきをつくのがきこえまし

た。

「もう、よかろう。エデン号は、よほど向うにはなれているから……」

学士は、別のスイッチを入れました。すると、ごとごとと音がして、ポンプがまわりだしました。それから、しゅう、しゅうと音がして、酸素ガスが鉄管から出てきました。そんなことが三十分ほどもつづいているうちに、室内の毒ガスは、きれいに洗いきよめられてしまいました。

学士は、そこで防毒面をとりました。

「大丈夫だ」

学士は、うなずきました。そしてこんどはよくねむっている春

夫少年のそばによつて、防毒面をぬがせてやりました。春夫のひたいや、鼻のあたまには、玉のようなあせがふきでていました。学士は、ハンカチーフを出して、それを念入りにふいてやりました。

「さあ、これでいいだろう。では、こつちもしばらくねむるとしようか」

学士は、ひとりごとをいって、椅子いすにこしをかけ、配電盤のまえの机に両ひじをつき、顔を腕のうえにのせました。

やがて、学士もまた、ぐうぐうといびきをかきはじめ、ゆめ路じをたどつたのであります。

深度零しんどれい

春夫少年は、ふと目がさめました。なにか大きなものの音をきいたように思いました。毛布から出て、むくむくと起きあがってみますと、青木学士が、潜望鏡にとりついて、うんうん呻うなっているのです。これにはおどろきました。

「青木さん、どうしたのですか」

「ああ、春夫君か。どうもへんなんだ。潜望鏡が上らなくなったんだ」

「故障ですか」

「故障にはちがいないが、ふつうの故障とはちがう。三センチばかりは、<sup>らく</sup>楽にあがるが、あとはどうしてもあがらないのだ」

「ふしぎですねえ」

春夫少年は、小首をかしげて、青木学士のそばへやってきました。学士が、潜望鏡のハンドルをもつて、ごつとんごつとんやっているのを、しばらく見ていた春夫少年は、やがてぷつとふきだしました。

「なんだい、笑うなんて」

青木学士が、きげんのわるいこえでいいました。

「だって青木さん。夜中に潜望鏡を出しても、仕方がないでしょ

う。なんにも見えないじゃありませんか」

「なにをねぼけているんだ、君は……時計を見たまえ。今は夜じやないよ。朝の五時ごろなんだぜ」

「えっ、もうそんな時刻ですか。こいつはしまった」

春夫少年は、腕時計を見ました。なるほどもう五時です。彼は、きまりわるる気げに、あたまをかきました。

「よくねむったもんだなあ。まだ夜中だと思っていましたよ」

「ねぼけちや、こまるねえ。しかし、こいつはよわった。外が見えないでは、こまるなあ」

春夫は、心細くなってきました。が、そのとき、気がついたことがありました。

「青木さん。そんなら、海面へうかんで、昇降口をあけたら、どうですか」

「そんなことをしては、危険だよ。先に潜望鏡を出して、あたりに敵のすがたのないことをたしかめた上で、うきあがるようにしなければなあ」

「なるほど、それはそうですね」

春夫は、またも失敗したかと、顔をあかくしながら、ふと深度計の針を見ました。するとおどろいたことに、深度計は零をさしていました。

「青木さん。この潜水艇は、もう海面へうきあがっているのじゃないのですか」

「そんなことはない」

「だって、これをごらんなさい。深度計の針は、零をさしていませんよ」

「そんなはずはない」

学士は、すぐさま、つよく言いかえしましたが、念のために目をうつしてみますと、これは意外！

「おや、いつの間に、深度が零になってしまったんだろうか。これはますますへんだぞ」

学士は深度計のガラスを、手でもって、かるくとんとんと叩いてみました。それは、もしや針がどこかにくっついていて、うごかなくなつたのではないかとおもい、針をはずすために、かるい



震動をあたえてみたのです。しかし、深度計の針は、あいかわらず、零のところにとまったきりでした。

「これは、ふしぎだ」

青木学士は、深度計のまえに腕組をして、うーむと呻りました。一体、どうしたわけでしょう。

ハツチひら  
かた  
口蓋開き方

「じょうだんじやない。この潜水艇は、推進器すいしんきがからまわりを

しているぞ」

青木学士が、大きなこえをだしました。よほどおどろいたものと見え、学士の顔は、まっかです。

「からまわりって？」

「からまわりというのは、推進器が、水の中でまわっていないで、空気の中でまわっているという意味だ」

「え、空気の中で？　すると、この豆潜水艇は、飛行機になって空中をとんでいるというわけですか。すごいなあ、この潜水艇は……」

「おだまり」

学士が、しかりつけました。

「え」

「いくらなんでも、豆潜水艇が飛行機になつたりするものか」

「あ、そうでしたね。この艇はジャガイモみたいな形をしているから、とても空中をとべないや」

春夫少年は、つい青木学士にわるいことをいつてしまつて、気の毒になりました。

しかし、つぎからつぎへと、このせまい豆潜水艇の中に、ふしぎなことがおこるものですから、春夫少年はなんとかして青木学士のため力をかしたいと思ひ、いろいろ考えるのですが、どうも青木学士にほめられるようなことになりません。

「思いきつて、昇降口をあけてみよう」

と、青木学士は、とつぜんいいだしました。

「えっ」

「空中に推進器がでているものとすれば、昇降口をあけても、水ははいつてこないわけだ。少しは危険かもしれないが、とにかく外の様子がわからないことには、なにもできやしない」

学士は、ついに決心をしたようです。

「春夫君。君に重大な用をいいつけるよ。昇降口を、用心しながら、そつとひらいてくれたまえ。そしてぼくが、しめろ！ といったら、大いそぎでしめるのだよ」

「青木さんは、どうするのですか」

「ぼくか。ぼくは昇降口のわずかの隙間すきまから外をのぞくのだ。な

にが見えるか、のぞいてみよう」

「ああ、あるほど、ぼくは大役ですね」

さあ、たいへんなことになってしまいました。へたをやれば豆潜水艇は、ここでぶくぶくと沈んでしまうかもしれません。春夫少年は、昇降口をひらくハンドルにつきました。

「よろしい、口蓋ハッチひら開き方かた、はじめ」

「はい」

栄螺さざえが、そろそろと蓋ふたをもちあげるように、いまこの豆潜水艇は、昇降口の蓋を、そろそろともちあげはじめました。学士は、かるわざし軽業師が梯子はしごの上へのぼったようなかつこう恰好かっこうをしています。

「あつ、しめろ！」——とたんに学士の命令です。

春夫は、あわてて口蓋を、がたんとしめました。

「島だ、島だ。島へのしあげている。そして……」

学士は、<sup>うわ</sup>上ずったこえでさけびました。

ふしぎな島？

さすがの青木学士も、よほどおどろいたものとみえ、にぎりこぶしで、とんとんと自分の胸をたたくばかりで、しばらくはあとの言葉がつづけられませんでした。

これを横からみている春夫少年は、気が気ではありません。

「ねえ、青木さん。早く話をしてよ。いま、ぼくに口蓋ハッチをあけさせて、青木さんは、いったい、なにを見たの？」

「し、島だ……」

「島を見ただけなら、なにもそんなにおどろくことはないじゃありませんか」

「と、ところが、あたり前じゃないんだ」

と、青木学士のことばは、すぐとぎれてしまいます。

「あたり前の島でないというと、どんな島？」

「それが、どうもへんなのだ。外国の水兵が立って番をしているんだ。しかも服装から見ると、アメリカの水兵なんだ。おどろく

のもむりではないじゃないか」

青木学士は、ようやくあたり前にお話ができるようになりました。

「なんです、アメリカの水兵ぐらい。ちつとも、こわいことはいや」

「それはそうだけれど、その水兵はものものしく武装をしているのだよ。つけ剣をした銃をもっていた。防毒面をかぶっていた。おかしいではないか。日本の領土から、それほどおくないところに、アメリカの水兵が、こんなものものしい姿をして番に立っている島があるのは、ふしぎすぎる話じゃないか」

青木学士にそういわれてみると、なるほどふしぎでもあり、へ



んです。日本の海岸をはなれて、船ふな足あしで、わずか二日か三日ぐらいのところに、そんな島があるとは、おかしな話です。

「グアム島じゃないかしら」

と、春夫少年が、思い出していいました。

「いいや、ちがう。グアム島へいくのには、もっと日数ひかずがかかるはずだ」

青木学士が、うちけしました。グアム島でないとする、いよいよこれはふしぎなことです。一体ここはどこなのでしょう。

## エンジンの音

とんとん、とん、とんとんとん。

今しめたばかりの口蓋ハッチが、外からしきりにたたかれるのでした。春夫少年は、青木学士の顔を見上げて、

「青木さん、あの音は、なんですか」

といえば、青木学士は、しつといて、目をくるくるさせました。青木学士は、そのとんとんという音に、じつと耳をすましています。

しばらくして、青木学士は春夫のうでをぐつとつかみ、

「あれはモールス符号ふごうだよ。国際通信の符号によって、あの音を

とくと、『ここを、すぐあけろ。あけないと、外から焼き切るぞ』  
といっているのだ。焼き切られては困るぞ」

「焼き切るぞなんて、けしからんアメリカの水兵ですね」

「しかし、本当に焼き切られてしまつては、とりかえしがつかない。なぜといつて、口蓋に大孔おおあながあくわけだから、そうになると、この豆潜水艇は、二度と水の中へもぐれなくなるわけだ。だから、しかたがない。しやくにさわるが、艇を傷つけられてしまつてもこまるから、口蓋をあけることにしよう」

「でも、口蓋をあけて外に出ると、アメリカ水兵のために、捕虜ほりよみたいな目にあわされるのじゃない？ そんなの、いやだなあ」

と、春夫は口蓋をあけるのをいやがりました。

「でも、しかたがないよ。ここは、そういうことにして、またなにかいいことを考えるよ。艇がこわされては、それこそどうすることもできない」

青木学士の顔は、くるしそうに見えました。そして春夫に代つて、ついに口蓋をあけました。

とたんに、上から軽機関銃の口が、ぬつとこつちをのぞきこんだではありませんか。

「出る。抵抗すると撃ち殺すぞ」

英語で命令です。

青木学士も、むつとするし、春夫少年も、その様子をさとしてしやくにさわりました。

でも、どうすることもできないので、青木学士は春夫をうながして、昇降口をのぼり、とうとう豆潜水艇から外に出ました。

「おとなしくしているんだぞ。抵抗すると、ひとつうち一撃だ」

いつの間にあつまつたか、そういつて号令をかけている目の青い下士官のほかにも、武装をしたアメリカ水兵が六人ばかり、二人をとりまきました。

春夫は、べつにおそろしいとも、なんとも思いませんでした。日本の水兵さんにくらべると、アメリカの水兵なんか、たいへんだらしなものに見えます。

それよりも、春夫をおどろかせたものがありました。それは、そのあたりの風景でありました。

「こんな島があるだろうか？」

青木は口蓋のすきまからここをのぞいて、これは島だといいました。なるほど、下は砂地です。そして椰子やしのような植物が生えております。小さいけれども、岩のようなものも見えます。海中から、いきなりこんなところにつれてこられたなら、なるほど、だれだつてここは島だとおもうにちがいません。

しかし島にしては、ちとおかしいことがあります。それは、水平線も見えなければ、あの青い海も見えないことです。頭の上を見ますと、すりガラスの天井があります。

これを島だというのは、どうでしょうか。一体ここはどうした場所なのでしょう。

「こら、少年。なぜ、じつとしていない。きよろきよろすることは許さん」

下士官のぺらぺらいう英語がわからないので、なおもきよろきよろしていたものですから、水兵がこわい顔をして、つかつかとそばへよってきました。

青木は、それと気がついて、春夫に注意をあたえ、彼を水兵からかばいました。

隊長らしい紳士しんし

これからどうなることかと、春夫少年が思っている、下士官たちに命じて、二人の前後をまもらせ、前へ進めと、あるかせました。

どこへつれていかれるのでしょうか。

砂地のうえをすこしばかりあるいていくと、地下室の入口のようなものが見えてきました。

「ここからおりるんだ」

下士官は、先に下りました。

春夫たちも、そのあとについて、階段をおりていきました。

おりたところは、天井の低い、ちょうど軍艦や汽船の中と似た



ようなところでありました。このとき春夫は、足の下から、かすかではあるが、ごつとんごつとんと、エンジンが廻っているらしい震動が、ひびいてくるのを感じました。

「一体ここは、どこだろうか？」

春夫には、そのなぞをとくことが、たのしみになってきました。もしもこのとき春夫が、おどろいたり、あわてたりしていたら、このかすかなエンジンの音などは、もちろんききのがしたことでありましよう。

やがて青木学士と春夫とは、ある一室へつれこまれました。そこは、天井こそ低いけれど、たいへんぜいたくなかざりのある部屋でありました。正面には、りっぱな机があり、ふかふかした肘ひじ

かけ椅子いすが一つおいてありましたが、その椅子には誰がすわるの  
でしようか。

下士官が、扉ドアをひらいて、さらに奥にはいつていきました。や  
がて彼が出てきたときには、白い麻の背広服をきた一人の紳士を  
ともなっていました。

からだの大きい、顔のたいへん赤く、鼻のとがった、そしてほ  
そい口くちひげ髭のある、目のするどい人物でありました。その紳士が、  
例れいのふかふかした肘かけ椅子に、どっかり腰をおろしました。そ  
の様子から考えると、彼はどうやら隊長らしいのでありました。

春夫は、その隊長紳士が、なにをはじめるのかと、目をみはつ  
ていました。

すると、その隊長紳士は、ポケットから、ピストルを出して、机の上におきました。それから、青木学士と春夫を、ぐつとにらみつけ、

「ああ、ここでは、わしの命令にしたがうか、それとも、このピストルの弾丸だんがんをくらって死ぬか、二つのうち一つしかないのだ」と、いやにおどかし文句をならべ、

「われわれは、いつでも、ほしいと思つたものを、かならず手に入れる力をもっている。お前たちは、小型潜水艇を、われわれの手にわたすまいとして、いくどもにげまわつたが、もうこれからのは、そんなむだなことはやめにするがいい。わかつたか」

と、彼は、いやにいばつていいました。

すると青木学士は、からからと笑いだしました。

「あははは。なにをいうか。われわれ日本人のやることに、君たち外国人のさしずはうけないぞ。からいばりはやめて、なにかそつちで、おしえをうけたいことがあるなら、ぼくらの前にどうぞおしえてくださいと、すなおに頭を下げたがいい」

青木が、きつぱりいい放つたことばに、隊長紳士は顔をいつそう赤くそめて、ぶるぶるふるえ出しました。きあ、この場のおさまりは、どうなることでしょうか。

とりかえっこ

その怪外人は、じつにいばっています。二人にむかつて、

「なにをいっても、もうだめだ。ここへはいつたが最後、お前たちを生かすのも殺すのも、わしの自由だ。なんでもはいはいといわないと、ためにならないぞ」

といって、彼はピストルをふりまわします。

青木学士は、考えました。

自分ひとりだけならいいが、水上少年と一しよですから、あまりひどいことをされてはこまると思いました。またその外人も、いいでしたら、あとへひきそうもない様子ですから、ここはしば

らく相手のいうとおりになって、あとですきをみて、なんとか、にげだす方法を考えることにしようと思ひました。

そこで青木学士は、二三歩、怪外人の前へあるいていつて、

「おい君。君がそんなにいうのは、あの豆潜水艇の中をしらべてみたが、どうしたら動いたり、浮いたり、沈んだりするのか、それがわからないので、僕たちをせめるのだろう。どうだ、あたつたろう」

白服の怪外人は、それをきくと、うーんとうなつて、また一その顔をあかくし、下士官たちの方をふりむきました。

そこで、青木学士は、ここぞと思ひ、

「だから、わからないなら、わからないとはつきりいつて、僕た

ちにおしえを乞<sup>こ</sup>えばいいじやないか。礼をつくせば、僕だって、おしえてやらぬこともない。自分のよわ味をかくそうとして、いばりちらすなんて、よくないことだ」

こういわれて、さすがの怪外人も、こまった様子です。それからというものは、急に彼は態度をかえて、ことばをやわらげました。

「いや、わしも、べつだん、事をあららげたくはないのだ。君が、かくさずおしえてくれるというのなら、尊敬をもって、説明をきいてもいいと思っている」

なにが尊敬でしょう。自分たちに都合がいいとなると、どんな白々しいことでもいう彼らでありました。

「じゃあ、説明をしましょう。しかしその前に一つ、非常に不審なことがあるんだが、あなたにたずねて答えてくれますかね」

と青木学士がいました。

「ははあ、交換条件というやつだな」

「まあ、そうですね。これはアメリカでもやることでしよう。承知してくれますね」

そういうと怪外人は、しばらく考えていましたが、やがてうなずいて、

「よろしい。一つだけ、君の質問に応じてもよろしい。ただし一つだけだよ」

青木学士は、一体なにを聞くつもりでしょうか。



## とつぜんのさわぎ

「これは、ぜひ知っておきたいことですが——僕たちの命はないものだと知っているから、死に土産みやげにきいておきたいと思うのだが、一体ここは、どこですか。島ですか、地下街ですか、それとも船ですか」

「ふーん、そんなことを知りたいというのか。そいつは、困ったね」

「さあ、答えてください。約束です」

「うむ、約束は約束だが……」

と、その怪外人はしばらく考えていましたが、やがて下士官をよんで、相談をしてから、

「よろしい。では話をしよう」

「それはありがとう」

「これは、わがアメリカが秘密に作った動く島なんだ」

「えっ、動く島ですか」

と、学士は、わざとおどろいた顔をしました。すると、かの怪外人は、ますますいい気になって、

「うふふん、どうだ、おどろいたろう。つまりこれは、浮きドツ

クから思いついたもので、ふだんは海面下にかくれていて、エンジンでもって思う方向へ動けるのだ。なにか太平洋に——太平洋にかぎったことはないが、とにかく事があると、この動く島は潜水艦や飛行機の母艦ぼかんになるのだ。油もうんとつんでいる。修繕しゅうぜん工場こうじょうもある。食料も一ぱいある。実はこの動く島は、いま試験のため、こうして……」

と、ここまでいったとき、かの怪外人は、急に口をつぐみました。

それは、うしろにいた下士官が服をひっぱったからです。調子にのって、秘密のことまで、ぺらぺらといいそうになったので、おどろいて注意をしたのです。

「いや、むにやむにやむにや。もうこのへんでいいだろう」

「ありがとう」

青木学士は、礼をいいました。

彼は、心の中にこう思いました。

「どうもそうだと思ったが、やっぱりそうであつた。これは、いかにもアメリカがやりそうな、ばかばかしい仕掛しかけである。こういう動く島を、これからたくさんこしらえて、太平洋の方々に浮かべておくつもりなんだろう。もちろんそれは、太平洋に、戦争がおこる日に役立たせるつもりにちがいない。これは試験的のものだというから、アメリカでは、まだこの動く島をたくさんは、つくっていないと見える。とにかく、これはいいことをきいたわい」

青木学士は、急にいのちがおしくなりました。

いのちがおいしいといつても、青木学士が急に卑怯ひきような人間になったのではありません。

そのわけは、だれもしらないこれだけのアメリカの秘密を知つたものですから、なんとかして、これを、祖国日本に知らせたいものと思つたのです。これなら、皆さんもきつと、満足に思われるでしょう。そうなのです。まったく、そのとおりなのであります。

おおてがら  
大手柄

さて、皆さん。

これから青木学士が、水上少年と力をあわせて、どんな風にして、アメリカ製のこの動く島から逃げだすことができたかと思いでですか。

もちろん、二人は、アメリカ人たちの手からのがれて、出ていってしまいましたとも。そのかわり、二人はいのちをなげだし、日本人の名をはずかしめないことをちかかって、じつに大胆不敵な方法でもって、この動く島から逃げだしたのです。

そのいさましい冒険物語を、くわしくかくと、とても、皆さん

がおよろこびになると思いますが、ざんねんながら、私はそれをいま、くわしくお話しているひまがありません。

だから、そのあらすじを、かいつまんでお話をいたしておきましよう。

かの怪外人が、豆潜水艇のうごかし方がわからないという知らせを部下の人たちからうけて、たいへんざんねんがり、そして、青木学士をせめつけたことは前にいいました。

そこで、ともかくも学士が折れて、怪外人をその豆潜水艇の中に案内したのです。もちろん、その外ほかに、三人ばかりの下士官や、機関兵が中へはいつてきました。

学士は四人を前にして、いろいろと熱心そうにみせかけて、な

るべくむずかしく、機械類の説明をはじめました。四人はだんだんそれに気をひかれて、水上少年のいることを忘れてしまいました。

じつは水上少年は、学士としめしあわせてあつて、四人の外人がすきをみせたら、この豆潜水艇の中にかくしてある軽機関銃をとりだして、うしろから四人に手をあげさせ、それからつづいて、潜水艇の口蓋ハッチをとじて、四人をあべこべに捕虜ほりよにしてしまうつもりでありました。

そのようにしめしあわせて、水上少年がすきを狙ねらっているとき、とつぜん思いがけないことがおこりました。

それはこの動く島が、一大音響とともに、急に非常に大きくゆ



れだしたことです。つづいて、大ぜいのうなりごえがきこえました。

一体、なにごとであろうと思っていると、豆潜水艇のそばへかけつけた一人の下士官が、外から大きなこえを出して、たった今、この動く島がとつぜん、もうれつな魚雷攻撃をくらい、ついに穴があいて沈みそうだというのです。それをきいた怪外人をはじめ、艇内にいた四人は、あわてて豆潜水艇の外へとびだしていきました。

あとにのこったのは、青木学士と、水上少年との元の二人です。学士はいそいで口蓋をぱたりとしめました。そのころ動く島の中へは、どうどうと海水がはいってきて、中にいたアメリカの水兵

たちは、おぼれそうになって、しきりに悲鳴をあげていました。

が、そのうちにその悲鳴も、ついにきこえなくなりました。動く島は、すっかり水びたしになり、おまけにあの大きなずうたい図体が四つぐらいにわれて、海の底にしずんでいったのです。

それにひきかえ、二人ののった豆潜水艇は、ゆっくりおちついて、割れた動く島の間からゆらりゆらりと海中にうごきだし、そして安全に航海をつづけて、また元の日本へかえってまいりました。

二人のお土産は、例の動く島の秘密と、そしてめずらしいこの冒険ものがたりとでありました。二人はお手柄をたてたというので、たいへんほめられました。これもあの小さい水上少年まで

が、あくまでつよい子供として頑張ったから、それでこのようにうまくいったのでしよう。

大分かけ足で申しあげましたが、まだ何かお話ししないことがのこっていますか。ああそうか、動く島へ魚雷をうちこんだのは、どこの国の軍艦かというのですか。それはいまさら私が申しませんでも、もう皆さんにおわかりでしょう。



# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第9巻 怪鳥艇」三一書房

1988（昭和63）年10月30日第1版第1刷発行

初出：「家の光」家の光協会

1941（昭和16）年8月～1942（昭和17）年1月号

入力：tatsuki

校正：土屋隆

2005年5月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 豆潜水艇の行方

海野十三

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>